

廃寺の謎

川崎ゆきお

「廃寺ですか？」

「アルプスじゃないよ」

「ああ、ハイジ」

「廃寺跡だ、ここは」

「廃寺の跡ですか」

「そうだ」

「じゃ、最初から廃寺」

「廃寺になってから長いので、それでいいんだ」

「廃寺を見たいです」

「見ているじゃないか、目の前にあるのが廃寺だ」

「廃寺跡でしょ。普通の廃寺が見たいです」

「私はこういうのを見て歩くのが好きだから、廃寺らしい廃寺を見たことがある。廃屋と同じだ。山の中だけだね。山寺なので何処かの別院だったのかもしれない。里は遠い。そのため、村寺ではない。山寺の周囲に民家はない。里もない。だから、この寺は修行のための寺かもしれない。その証拠というわけではないが、墓がない。墓場がない。よって里の村人とは関わりのない寺だったようだ。従って檀家もいない」

「それが廃寺ですか」

「まだ生々しい。布とかが散乱していた。座布団もね。大事なものは持ち帰ったのだろう。空の須弥壇がある。そこに本尊があったんだろうが、台座もない。戸は割れ、雨がよく当たる箇所は腐っている。幸い屋根はあるし、柱も無事で倒れてはいない。これは危険な場所だよ。しかし、立入り禁止のロープもない。朽ちるままだ。一年後、行ってみたが、そのままだ。建て替えたりする気はないのだろう。これが私が見た最高級の廃寺だ」

「そういうのが見たいです。ここなんて、廃寺跡でしょ。何もありません」

「いや、建物が建っていた頃の溝などが出て来ておる。それをそのまま残している」

「台だけでは」

「そうだね」

「これはどう観賞するのでしょうか」

「縄張りを見る」

「縄はないですが」

「そうじゃなく、建物の配置だよ」

「はいはい」

「それで形式が分かる」

「はあ。でもそんなの知りません」

「まあいい。それを保存しているだけでも立派なものだ。別の廃寺では、ただの森になっている。何処に何があったのかは分からないが、大きな石しか残っておらん。それも動かしておる。元々どんな寺だったのかも、もう分からん。そこに別のお寺が建っている。廃寺とは何の関係もない」

「資料にも出てこないのですか」

「テラアトと絵地図に記されている。それ以前の資料はない」

「僕は古墳巡りや、住居跡巡りが好きなので、ここにも寄ったのですが、廃寺もいいですねえ」

「廃寺は、古文書で探すようだよ」

「ほう」

「誰かが書き残したもののの中に寺の名が出て来たりする。名前だけ」

「そういうのは昔からしっかり記録されていないのですか。その宗派の本山などが」

「そこから離れた寺も多い。私寺のようなものだ。大昔の金持ちが勝手に建てたようなね。供養のために」

「はい」

「その金持ちが衰退すると、廃寺だ」

「宗派はあるでしょ」

「宗派よりも先に仏像だ」

「はあ？」

「日本でまだ仏像が作られておらんかったとき、海を渡ってきた仏像がある。もうそれだけでいい」

「仏教伝来以前の話ですね」

「いやいや、既にこちらへ仏像は来ていただろう。まあ、貴族のための仏教がね」

「国分寺もありましたねえ」

「上手くお寺のシステムを利用したんだろうねえ。民家よりも大きいし、無駄に高い塔を建てる。これは見せるためだろう」

「古墳もいいですが廃寺もいいですねえ」

「誰がどんな情念で建てたのかはもう分からなかったりする。御本尊も分からない。ただ、何故この場所なのかを推測すればいい」

「ここは昔から殺風景な場所ですよ」

「この寺が建った年代、誰が治めていた土地などから推測を始める」

「はい」

「それと寺の様式だ。縄張りだね。これで、塔の高さやお堂の規模も分かる。まあ、あまり言えないがね」

「え、何が言えないのですか」

「この廃寺跡、こんなものじゃないらしいよ。これはこっそり聞き出したんだけど」

「え、何をです」

「敷地はもっと広い。掘れば出て来る。そこに竹藪があるだろ」

「はい」

「怖くて宅地にできないんだ」

「下に」

「あることは分かっているらしい」

「田圃がこの辺り結構残っていますが」

「深く耕すと出て来るわけじゃないけど、マンションなんかを建てる時、まずいねえ。結構掘るから」

「はい」

「しかし、この廃寺、建てた人物は本当に分からないらしいよ。当時の貴族らしいが、それもどうだか。本当にお寺だったのかどうか」

「廃寺でしょ。お寺でしょ」

「リゾート」

「えっ」

「この近くに温泉跡がある。昔、沸いていたんだろうねえ」

「そうなんですか」

「竜宮のようなものだったのかもしれない、私は想像している」

「天女が舞いますか」

「泳いでいる湯女もね」

了